

「いいたて学」のルーツは震災直後の飯館中学校にありました

大震災の発災からひと月が経過した平成23年4月、飯館中学校は、川俣高校の一角を借りて学校を再開しました。4つの教室に6学級。特別教室もなくトイレは仮設という不自由な環境。放射線対策のために夏でも長袖、窓を締め切った授業で、屋外での活動も行えませんでした。

同年8月に着任した遠藤哲校長（現教育長）は、約7割の生徒が間借りの窮屈な校舎に残り、けなげに学校生活を送っているのを見て、新しい取り組みを進めようと決意します。「厳しい学習環境が我慢する心を育て、多くのご支援が感謝の気持ちを育てる」と状況を捉え直し、「今だから、飯館中学校だからできること」「感謝の気持ちを変えて」をスローガンに。支援に感謝するばかりではなく、中学生の活力を積極的に発信し、被災された方々に元氣と勇気を届けようと、平成24年7月には「仮設住宅訪問」を開始しました。

同8月には、福島市飯野町に、空き工場を改修した仮設校舎が完成。念願の特別教室、運動場、体育館、テニスコートも順次整備され、学校生活は徐々に落ち着きを取り戻していきました。仮設訪問をきっかけに始まった活動は、翌25年度から、総合的な学習の時間に「ふるさと学習」として位置づけられました。

これが「いいたて学」のルーツとなっています。



仮設住宅で行っていた奉仕活動や交流活動、田植え踊りの披露などが「ふるさと学習」に引き継がれていきました。

※写真は平成26年度



仮設住宅での活動が原点に

「離れていてもふるさととはふるさと」「子や孫に会えなくなっているおじいさん、おばあさんを喜ばせたい」…そんなシンブルな発想から始まった仮設住宅訪問。支援に感謝するばかりで、一杯の学校生活でしたから、村民に喜んでもらえる活動ができたことは、大きな経験でした。

仮設の自室から出てこなかったお年寄りが田植え踊りを見るために車椅子で出てきてくれたこともあり、子ども達も、活動の意義を自覚していくと同時に、気持ちも穏やかになっていました。

自分も村の人も元氣になるために始まった原点が生かされ、地に足のついたよい活動が展開されています。「いいたて学」としての発展は、その後の生徒や先生方の努力の賜物です。ふるさとを知ることとは大切なこと。村の教育の特色にもなっていると考えています。



飯館村教育委員会 遠藤 哲 教育長
元飯館中学校長。（平成23年8月から同25年度）
令和元年度から飯館村教育委員会教育長。

避難の中で飯館を学んだ「ふるさと学習」

仮設住宅で行った清掃や炊き出しなどの奉仕活動を基に、避難の中でふるさとを学ぶ「ふるさと学習」が始まりました。伝統文化の継承として、田植え踊り、民話紙芝居、郷土料理などへの取り組みが本格化。村民を講師に迎えて「飯館町の田植

え踊り」「小宮の田植え踊り」「はなづか太鼓」などを習い、披露もできるようにになりました。

また、避難先でも前を向く村民を取材し、さらには震災前の村についても調べ、全村避難中の飯館村の魅力あるふるさととして発信。「継承から創造へ」と掲げた

平成28年度には、当事者として「復興」を考えようという活動も展開しました（左の写真）。

これら5年間にわたる活動が評価され、飯館中学校の「ふるさと学習」は、平成28年11月に、「博報賞」教育活性化部門・文部科学大臣賞を受賞しました。



文化に触れ人と関わり ふるさとのよさを感じていました



佐藤 柁哉 さん
飯館中学校・平成28年度の卒業生。中学時代は3年間仮設校舎で学びました。現在は茨城県で大学生を送っています。

「ふるさと学習」の活動では、赤蜻祭での田植え踊りや、民話紙芝居のレコーディングなどが特に印象に残っています。避難の中で、出身の村の文化を知ることが、大きなテーマとしてありました。仮設訪問などで村の方と交流したり、田植え踊りを通して先輩とつながりが持てたり、いろいろな人と関わることができたのも大きな経験でした。

学びを通して、飯館村には、無理に周りに合わせることはせずに、もともと持っているものや得意なものを大事に

生かして頑張ろうという「よさ」がある」と感じています。

大学で都市計画について学んでいるのですが、地方再生というカテゴリーで、自治体の取り組みや被災地の再生について学ぶ時、飯館村のことを思い出します。仮設訪問などを通して、その実情を知っていることも、被災地出身の自分の経験として大きいものと思っています。

現在の学校で「いいたて学」を学ぶ皆さんにも、村でしかできないことをたくさん経験してほしいですね。